



《暨南外语博士文库》

获广东省优势重点学科建设项目和暨南大学重点学科建设项目资助

关于日语复合助动词的研究

——以「ノダ」为中心

王宝锋 著



中国出版集团
世界图书出版公司

王宝锋

暨南大学外国语学院教师，博士。2007年毕业于日本拓殖大学研究生院，获语言教育学博士学位。主要研究方向为语言学、教育学、比较语言学等。在日本的《日本语教育研究》以及国内的核心期刊等刊物上发表论文十余篇。主持和参与多项社科基金、教改项目。

策划编辑 刘正武

责任编辑 程 静

李嘉芸

责任技编 刘上锦

余坤泽

封面设计



书窗设计
赵煜森、钟清、张雪峰



《阿朗索·德·比耶加斯·塞尔瓦戈的《塞尔瓦希亚喜剧》(1554)的出版与研究》

《论语境对语篇的影响》

《关于形态变化对语序及主语脱落影响的历史性研究》

《电视访谈中话语缓和的语用研究》

《〈尤利西斯〉文体研究》

《后现代文艺转型期纳博科夫小说美学思想研究》

《日译吴音的读音层次与六朝南音》

《关于日语复合助动词的研究》

ISBN 978-7-5100-9214-5



定价：45.00元

关于日语复合助动词的研究

——以「ノダ」为中心

王宝锋 著

《暨南外语博士文库》

主编 / 宫 齐
副主编 / 王 琢 / 蒲若茜



中国出版集团
世界图书出版公司

图书在版编目(CIP)数据

关于日语复合助动词的研究/王宝锋著. —广州:
世界图书出版广东有限公司, 2015.1
ISBN 978-7-5100-9214-5

I. ①关… II. ①王… III. ①日语—复合词—助
动词—研究 IV. ①H364.2

中国版本图书馆CIP数据核字(2015)第020410号

关于日语复合助动词的研究——以「ノダ」为中心

策划编辑: 刘正武

责任编辑: 程 静 李嘉荟

出版发行: 世界图书出版广东有限公司

(广州市新港西路大江冲25号 邮编: 510300)

电 话: (020)84451969 84453623 84184026

http: //www.gdst.com.cn E-mail: pub@gdst.com.cn

经 销: 各地新华书店

印 刷: 广东天鑫源印刷有限责任公司

版 次: 2014年12月第1版

印 次: 2014年12月第1次印刷

开 本: 880mm × 1 230mm 1/32

字 数: 230千

印 张: 12.75

ISBN 978-7-5100-9214-5/H·0902

定 价: 45.00元

版权所有 侵权必究

咨询、投稿: 020-84460251 gzlzw@126.com

总 序

暨南大学创办于1906年，是我国第一所由国家创办的华侨高等学府，是目前在全国招收港澳台和海外华侨学生最多的高校，是国家“211工程”重点综合性大学。“暨南”二字出自《尚书·禹贡》篇：“东渐于海，西被于流沙，朔南暨，声教讫于四海。”意即面向南洋，将中华文化远播到五洲四海。

暨南大学外国语学院的前身是创办于1927年的外国语言文学系，历史上曾有许多著名专家、学者在该系任教，如叶公超、梁实秋、钱钟书、许国璋等。1978年复办后，外语系在曾昭科教授、翁显良教授的主持下，教学与科研成绩斐然，1981年外国语言文学系获国家第一批硕士学位授予权，成为暨南大学最早拥有硕士授予权的单位之一。当时的英语语言文学硕士点以文学为主、专长翻译，翁显良、曾昭科、张鸾铃、谭时霖、黄均、黄锡祥等一大批优秀学者先后担任硕士研究生导师，他们治学严谨，成绩卓著，为我们今天的发展奠定了坚实的基础。

如今，外国语学院已拥有专任教师138人，其中教授10人，副教授46人，讲师70余人。教授中有博士生导师2人，硕士生导师37人。学院教师中获博士学位者36人，在读博士20余人。现有英语语言文学系、商务英语系、日语系、法语系和大学英语教学部等5个教学单位，有外国文学研究所、应用语言研究所、跨文化及翻译研究所、日本语言文化研究所及外语教学研究中心等5个专门的研究机构。学院现有外国语言文学硕士学位一级学科授权点，有英语语言文学、外国语言学及应用语言学、日语语言文学3个二级学科，以及翻译硕士专业(MTI)学位授权点。英美文学方向主要为华裔美国文学研究、英美女性文学和英美后现代文学研究；外国语言学及应用

语言学方向以理论语言学、功能语言学和音系学为研究特色；日语语言文学方向侧重现当代日本文学、日中比较文学、日语语言及中日文化研究；翻译方向从语言学、文学和文化等多个层面探讨翻译理论与实践，突出翻译的实践性。研究生导师大多数具有海外大学或学术机构从事教学、科研和进修的经历。目前，学院教师主持国家社科基金项目6项，教育部、广东省社科规划项目数十项。

《暨南外语博士文库》丛书(以下简称《文库》)是暨南大学外国语学院部分获博士学位教师的研究成果，它的编纂主要基于以下目的：首先，是对近十几年来我校外语学科获博士学位教师研究成果的梳理；其次，为我校中、青年外语学人搭建展示团队科研成果的平台，以显示本学科发展的集群效应；第三，旨在激励暨南外语学人不断进取，勇攀教学、科研的新高峰，再创新辉煌。《文库》主要收录了2000年以后我校外语学科博士学位获得者尚未正式出版的博士论文，这些论文均经本人反复修改和校对，再经相关方向博士生导师的认真审阅后提交出版社排版付梓。《文库》涵盖了语言学、外国文学、翻译、文化及其他相关学科，涉及语种包括汉语、英语、日语、法语、西班牙语等。《文库》第一批拟出版8部，其他教师的博士论文将在此后陆续编排、出版。

《文库》的成果是新一代暨南外语学人孜孜不倦、努力奋进的结晶，是他们宁静致远、潜心治学的象征。这些成果代表了暨南外语学科的进步与发展，预示着我们的未来和希望，这也是我们献给暨南大学110周年校庆和外国语学院90周年华诞的一份厚礼。

《文库》的出版得到了广东省优势重点学科建设项目和我校重点学科建设项目的支持，此外世界图书出版公司在本套丛书的编辑、设计等方面付出了大量心血，在此我们一并表示衷心感谢！

编 者

2013年12月16日

序 一

日本語教育で、いくつか理解も説明も極めて困難な問題がある。本書は、日本語教育で、その難解さのために、長い間懸案になっていた「ノダ」の用法に関する画期的な論考である。

「ノダ」については、今までに様々な先行研究がなされてきた。従来の研究では「主観的責任」とか「客体化」、「概念化」、「既成命題化」、「スコープ」、「情報共有」、「既定性」などの概念によるものや「強調」、「説明」などの機能によって分析が進められてきたそれらは言語学的な観点からのもので、複雑かつ難解で専門家ですら理解が難しく、実際の教育現場でどのように生かしてよいか困惑するようなものが多かった。野田春美氏の「ノダ」の用法全体を統一しようとする理論も、「スコープ」と「ムード」と大きく二つに分かれており、「ノダ」の他の機能的な命令や説得などの「ノダ」の用法などは取り扱われていない。その他の研究も統一する理論とはなっておらず、ほとんどの論文が「準体助詞の『ノ』+『ダ』」という組成説明に拘泥しており、その説明も極めて難解なもので、日本語教育の現場で日本語学習者に説明するのも、理解を得るのも難しく教師を困惑させていた。そのため、現場では、「ノダ」の多岐にわたる用法を個々に説明するにとどめていた。しかし、王宝鋒氏は、この難問に、今まで誰も考えつかなかった「了解作用」という独創的な観点から今まで不可能だった「ノダ」の用法を明らかにした。

「ノダ」の用法は、王宝鋒氏によれば①「解釈」②「確認・再確認」③「発見」④「納得する」⑤「反省」⑥「想起」⑦「原因・理由の説明」⑧「説得・理由の説明」⑨「説得・納得させる」⑩「促す命令」⑪「理

解してもらうための状況説明」⑩「告発・決意」と多岐にわたる。王宝鋒氏はこれらの①から⑥までを対自的了解作用（わかる）と⑦から⑪までを対他的了解作用（わからせる）の二つに分け、両者を了解作用として一つの概念で説明した。この説は、極めてシンプルで、また、個々の例に当てはめてもわかりやすい画期的なものである。

王宝鋒氏が2000年4月に私の研究室に研究生として来て以来、博士号を取得するまでに7年の歳月がかかった。氏は、この間この困難な問題を課題として苦闘していた。拓殖大学大学院において、研鑽を積み、日本語教育のみならず、認知言語学、語用論と其の専門性は多岐にわたる。在学中に、日本語教育の分野では有名な専門誌にも複数の論文を発表している。日本での学会などで積極的自らの見解を発表してきた。関連する論文があれば、茨城県だろうが千葉県だろうが、ただちに出向き論文を閲覧させてもらうなどの努力を重ねていた。しかし、最後まで「ノダ」の厚い壁は破れずに呻吟する毎日であった。しかし、論文提出の直前、ついに、その時は訪れた。それは、私の研究室で「ノダ」について議論しているときのことだった。「先生、ひょっとして『ノダ』は「わかる」とか「わからせる」といった機能に結びついているのでは…」、これがそれまで誰も考え付かなかった「了解作用としての『ノダ』」という画期的なアイデアにたどり着いた瞬間であった。

今後は、この研究能力と粘りを生かし、日本語教育に大きく貢献することを切に期待している。

2013年10月28日

拓殖大学大学院

言語教育研究科委員長、教授

石川 守

序 二

このたび、王宝鋒著『日本語複合動詞に関する研究—「ノダ」を中心に』が出版されることになりました。世界で最も多くの日本語学習者、日本語教育者、言語研究者を有する中国で本書が刊行されることは喜びに堪えません。

本書は、王宝鋒が拓殖大学大学院言語教育研究科に言語教育学専攻博士論文として2007年3月に提出した『了解作用の「ノダ」に関する研究』を書き直し、その後の調査研究を新たに書き加えて上梓したものです。ここでは元の博士論文について簡単に紹介しておきます。論文は、序論、第1章「ノダ」文に関する先行研究、第2章「ノダ」文に関する一考察、第3章「ノダ」文と中国語の「…是…的」文の対照研究、終章、参考文献から成り、A4版157頁の大著です。本研究は、文末助辞「ノダ」の本質を話者の了解作用を示すものとして捉え、その文法機能、意味用法の分析解明を行い、「ノダ」文の有する多様な用法から多義構造のメカニズム究明を目指したものです。さらに、中国語の「…是…的」文との対照研究を行い、両者の機能と特徴から共通点・相違点を明らかにし、日本語教育における指導上の留意点を考察しました。この論文は日本語の複合動詞に関する最新の研究成果を加えて刊行された本書は、日本語教育学だけではなく広く言語教育学に興味と関心を有する多くの方々に役に立つ資料となることは間違いないものと信じます。

次に、著者王宝鋒について簡単に記しておきます。同氏は鈴木

敏央政経学部教授の知遇を得、日本語教授法研究のため来日しました。鈴木教授の紹介で、2000年に拓殖大学大学院言語教育研究科に研究生として在籍することになりました。この時、私は同研究科日本語教育学専攻主任として、初めて同氏に会いました。痩せた形で精悍な感じの好青年でした。翌年同氏は、同研究科日本語教育学専攻に入学しました。乞われるままに指導教授となった私のもとで研究に励み、2003年に博士前期課程を修了し、修士号を取得しました。同氏は、引き続き博士後期課程に進学し、石川守教授の指導を受け、2007年に所定の課程を修了し、上記の論文を提出、最終試験に合格し、「博士（言語教育学）」の学位を取得しました。同氏は中国に帰国後、広州市の暨南大学外国語学院の専任教師として勤務し、日本語・日本言語文化の指導にあたりました。

著者は、拓殖大学大学院の研究環境の中で基礎訓練の重大なことを自覚して、研鑽を積み、真摯に取り組みました。今、それが専門教育指導者として生かされていることを、嘗ての指導教授として嬉しく思います。

日本語教育を実践する人、あるいは言語教育の研究者には、国際性、教育性、専門性の三つの資質能力が求められます。教育研究関係者がこの資質能力を保持し、より高めるための良き参考文献として本書を活用されることを期待しています。国際交流の発展、学術文化の充実を祈念し、本書の序文とします。

2013年10月 東京にて
拓殖大学名誉教授 川瀬 生郎

目 录

第1章 序論	1
1.1 研究の目的と意義	1
1.2 考察の対象と構成	4
第2章 「ノダ」文に関する先行研究	11
2.1 「ノダ」の品詞についての研究考察	11
2.2 「ノダ」の意味・用法	14
2.3 「ノダ」の本質・基本的機能	16
2.4 「ノダ」の二種類の機能	19
2.5 野田春美の「ムード」と「スコープ」説	24
2.6 問題の提起	33
第3章 「ノダ」文の機能、構造に関する考察	36
3.1 「ノダ」文の研究遷移	38
3.2 「ノダ」文についての統一的な説明原理	61
3.3 「ノダ」に関する五種類の用法、機能の記述	86
3.4 「ノダ」文の基本的意味に関する諸説の再検討	87
3.5 「ノダ」文の基本的意味の三つの特性に関する再検討の結果	111

3.6 「ノダ」文の本質	115
第4章 複合助動詞「ノダ」の「了解作用」	119
4.1 日本語教育の視座における「ノダ」の機能・用法の考察	119
4.2 「ノダ」文の用法の分類	124
4.3 「ノダ」による促す命令、認識強要、告白・決意	147
4.4 「ノダ」の了解作用に関する認知分析の試み	152
4.5 「ノダ」文の型	164
4.6 「ノダ」文の特質	169
4.7 「ノダ」のはたらきと使用条件	176
4.8 「ノダ」文の過去形	187
4.9 まとめ	200
第5章 「ノダ」文の対照研究	206
5.1 対照研究とは何か	206
5.2 対照研究分析の前提	210
5.3 先行研究の検討	253
5.4 「ノダ」文と「…是…的…」文の対照研究	258
5.5 まとめ	276
第6章 終章	280
6.1 本研究の意義および結論	280
6.2 問題の反省と今後の課題	287
補説 「ノダ」文研究に関する遷移	289
1. 断定の助動詞の接続の視点からの言及	289

2. 意味・用法の分析と記述.....	291
3. 「ノダ」とその周辺の他の形.....	347
参考文献.....	361
日本語関係参考文献.....	361
中国語関係参考文献.....	383
中国語用例の出典.....	389
后 记.....	390

第1章 序論

1.1 研究の目的と意義

現代の日本語の特徴の一つは、複合助動詞というものがある。「複合助動詞」という呼称は、本書におかれている特別な言い方であり、厳密な定義は、本書の関連箇所譲る。

日常の会話をよく注意して聞くと、「～ノダ」、「～ンデス」という言い方が極めて頻繁に用いられていることに気がつく。「～ンデスカ」、「～ンデショウ」、「～ンジャアリマセン」、「～ンナラ〜」、「～ンダカラ〜」などの形で用いられていることも多い。日常の会話だけではなく、書かれた文章の中にも、「～ノダ」、「～ノデアル」その他のかたちでしばしば顔を出す。こうした言い方は、すべてまとめて、複合助動詞¹「ノダ」と呼ばれている。

1 『日本国語大辞典』(第六巻、P, 11)によれば、①西欧語で、もと独立した動詞であったものが、他の動詞を補助して相(mood)や時(tense)などを表わす役目を持つようになったもの。独立性の点で、日本語の補助用言に近い。②助動詞とは「日本語で、付属語のうち、活用のあるものである。」、[他の自立語(詞)、または自立語を含む連語に付属して、叙述の意義を補ったり、話し手の判断の性質を表現したりする。助詞とともに、付属語、または辞として呼ばれる。助辞。]*改正増補和英語林集成「Jodoshi ジョドウシ 助動詞」*『語法指南』(大槻文彦)では、「助動詞は、動詞の変化の、其意を尽くさざるを助けむが為に、別に其下に附きて、更に、種々の意義を添ふる語なり」補注(1)助動詞の種類は、次のように分けられる。(イ)意味から見て一受身・可能・自発・使役・尊敬・丁寧・打消・過去・完了・推量・未来・意志・希望・指定・比況・様態・伝聞推定・詠嘆など。(ロ)接続から見て一未然形につくもの・連用形につくもの・終止形につくもの・連体形につくもの・已然形につくもの・命令形につくもの・種々の語につくもの。(ハ)活用形形式から見て一動詞型活用・形容詞型活用・形容動詞型活用・特殊活用。(2)「使役・受身(可能・自発)・希望」の助動詞とその他の助動詞との間に、文節構成上の役割の違いが認められ、学説によっては、これを接尾語とする。

さて、このように頻繁に用いられる複合助動詞の「ノダ」であるが、これはいったいどのようなはたらきをするものなのであろうか。「ノダ」が使われている文から「ノダ」を取り除いて見ても、表現される内容にはあまり変化がないように感じられることも多い。だとすれば、「ノダ」は、あってもなくてもよい、言わばかたちだけのものなのであろうか。

実際には、複合助動詞「ノダ」の表現の用法に関する研究はすでに多くの文献に見られるが、日本語教育の立場からの分析はまだ少ないように思われる。いかに用法が理論的に説明されたとしても肝心の使うべき場面が明らかにされなければ、日本語学習者は「ノダ」表現が使いこなせない。

日本語非母語話者に日本語を教えていると、いつ「ノダ」表現を用いればよいのかわからない、という声をよく耳にする。実際、中級、上級レベルの学習者の中でも複合助動詞¹「ノダ」表現を不適切な場面で使ってしまう学生が少なくない。「ノダ」文は話しことばでは「ノデス」のかたちになり、「です」「ます」文に並び、話しことばの中で使われる頻度の高い表現であるが、「です」「ます」文と同じ機能で使われるわけではない。

次の用例を見てみよう。

1 なお、『大辞泉』の助動詞についての定義は前文の『日本語国語大辞典』の説明と若干異なる点がある。「品詞の一つ。日本語では、付属語(辞)のうち、活用があるものをさす。用言や体言といった自立語(詞)に付いて、意味を加える。英語では、動詞であったものが変化して、時制や叙法を表すようになった語。① 国語の品詞の一。付属語で活用のあるもの。用言や他の助動詞に付いて、これにいろいろな意味を加えて叙述を助けたり、名詞その他の語について、これに叙述のはたらきを与えたりする。その表す意味によって、受け身・自発・可能・尊敬・使役・打ち消し・過去・完了・推量・意志・希望・伝聞・様態・断定・比況・丁寧などに分類する。動辞。② ヨーロッパ諸語で、もと独立の動詞であった語が、他の動詞を補助してムードやテンスなどを表すはたらきをなすようになった語。たとえば、英語の shall, will などの類。